

スコット・ショウ  
中村ひろこ、翻訳

Copyright 2006 by Scott Shaw – all rights reserved

イギリスのパイプ・オルガンの歴史は、複雑に入り組んだ物語だ。急激な発展と衰退が交互に織りなされ、大いに革新が進んだかと思えば完全に停滞した時期もある。ヨーロッパ大陸のオルガンに似通っていた時代もあれば、ヨーロッパのどこにも見られない独自の様式をもっていた時代もある。

イギリス・オルガンの歴史は、大きく3つの時期に分けることができる。第1期は、ルネサンス期と宗教改革の激動期を包含する時代。第2期は1660～1830年にかけての時代で、本稿で主に述べる。1830年から現代までの第3期に関しては、次回に論ずる。

ルネサンス期のイギリスのオルガンに関する研究は、現存する楽器ではなく記録によって進めざるを得ない。今日のイギリスのどこを見ても、大聖堂・教会・チャペルのどれをとっても、1660年以前に建造されたオルガンはただの一台も存在しないのである。ヨーロッパ大陸では16世紀あるいはそれ以前に遡る楽器も何台か現存していることを鑑みると、イギリスは不毛の地だ。この国では、17世紀以前には大聖堂、教区教会やチャペルではオルガンが使われていなかったのか？あるいは、大規模な災厄が襲って、国中からパイプ・オルガンが一掃されてしまったのか？

宗教改革以前のカトリック国であったイギリスは、当然のこととしてオルガンを使用していた。この時代の教会のオルガンは、同時期のヨーロッパ大陸のオルガン、ことに南ヨーロッパの楽器に類似している。スティーヴン・ビクネルは、著書『イギリス・オルガンの歴史』<sup>1</sup>の中で1500年前後の典型的なイギリス・オルガンを、以下のように描写している。「……最大で46音に達する音域の広い一段鍵盤……それぞれの列を操作するストップ・ノブを持つ。ミクスチュアはなかった」。<sup>2</sup> こうした小さめの楽器にはペダルがなかったことも注目に値する。この時代のオルガンは主として歌の伴奏に用いられ、それゆえ教会における典礼の中心近くに位置していた。オルガン音楽はほとんどがプレインソング（グレゴリオ聖歌）に基づくもので、典礼音楽をオルガンと聖歌が交互に演奏したこともあっただろう。大きな音量は求められなかったから、オルガンはおしなべて小型だった（後世の基準からいえば）。大きな教会や大聖堂においては、建物の中に複数のオルガンがあって、それぞれ異なる場所で用いられることも珍しくなかった。現存する楽器がなく、また当時にさかのぼる正確なストップ・リストも残っていないので、以下に示すビクネルが再建した楽器のストップ・リストが当時の一つの典型とされる。

#### 1. Principal, 2. Octave, 3. Octave, 4. Superoctave, 5. Superoctave

この小型オルガンを現代の用語で説明するならば、プリンシパル族のストップ、それも現代の8フィート、4フィート、2フィートに相当するものしかない。また、フルート・ストップもリード・ストップもミクスチュアもない。

なぜ、こうした様式のオルガンが今日のイギリスに1台も残っていないのか。その疑問に答えるには、イギリスにおける宗教改革について考察する必要がある。イギリスの教会

の世界からすべてのオルガンを一掃した災厄とは、宗教改革にほかならないのだ。きわめて長い期間にわたって荒れ狂ったイギリスの宗教改革は、教会オルガンのみならず、ステンドグラス、壁画、彫像といった教会の装飾全般にとって致命的なものとなった。宗教改革とは、ヘンリー8世による1534年の「国王至上法」発布から1660年の王政復古までの約120年間を指す。プロテスタントとカトリック、後にはプロテスタント相互（清教徒対英国国教会）の抗争の歴史について、本稿でくわしく触れるゆとりはない。清教徒が実権をふるった時期には教会の礼拝でオルガンをを用いるのは不相当とされた、といえは十分だろう。この時期には、新しいオルガンが発注されることも建造されることもなく、すでにあったオルガンは教会から撤去された。逆に、カトリックであろうと国教会であろうと典礼を重んずる一派が力をふるった時期には、オルガンは必要なものとされ、教会に戻されたり新たに建造されたりした。

このように、宗教改革は最終的にはイギリス・オルガンにとって致命的なものとはなかったが、短いながら明るい時期もあった。清教徒の力が弱まった時期、オルガンは再建されただけにとどまらなかったのだ。事実、この時期にいくつかの革新がなされた。典型的なルネサンス・オルガンと比べてもっとも重要な変化は、イギリス特有の「ダブル・オルガン」の誕生である。標準的なルネサンス・オルガンと、より小型のポジティブ・オルガンという、タイプが異なる2つの楽器を組み合わせたものだ。最初は、単純に別々のオルガンをオルガニストの手の届くところに2台置いて、音楽の必要に応じて弾き分けられるようにしたものだった。1600年前後になるとこの2台が1台に組み合わせられ、2段手鍵盤をもつダブル・オルガン、または「組オルガン a pair of organs」としてイギリスに知られるようになった。これは、この型の一例として、ロバート・ダラムが1613年にウースター大聖堂に建造した楽器がある。<sup>3</sup>

<b>Great (第2鍵盤)</b>	<b>Chair (第1鍵盤)</b>
Open Diapason (2列)	(Stop) Diapason
Principal (2列)	Principal
Small Principals at Fifteenth (2列)	Flute
Twelfth	Small Principal or Fifteenth
Recorder	Two and Twentieth

これによると、単に手鍵盤が2段になっただけでなく、フルート・ストップとミュートーション・ストップが組み込まれたことが見てとれる。小さな一歩だが、オルガンは1500年代のルネサンス・オルガンと比べて、はるかに多彩な音色をもつに至ったのである。ウースター大聖堂にとっては不幸なことに、このオルガンは1649年に撤去された（そして破壊された？）。その後、1660年まで教会にオルガンが響くことはなかった。

清教徒の力は内戦の終わり頃から共和制の時代にかけて、つまり1644年～1660年頃に最高潮に達した。1644年に公布された、すべての「迷信的遺物」の破壊を認める法律が、イギリス・オルガンの弔鐘となった。<sup>4</sup> これ以降、イングランドおよびウェールズの全域で、大聖堂・大学・教区教会・礼拝堂の如何を問わず、オルガンや図像などに対する破壊

行為が加速する結果となる。議会軍の兵士たちは、政府公認で喜々として国中の教会を冒瀆したのである。兵士たちがオルガンの金属パイプを粉碎し、オルガン・ケースを路上で燃やしたという記録もある。1660年に共和制が終わりを告げるまで、パイプ・オルガンの響きを聴けるのは、宮廷や裕福な家庭といった世俗的な場だけに限られていた。

初期イギリス・オルガンの第2期は、チャールズ二世によって王政復古が宣言された1660年から始まる。この時点で英国国教会が再建され、それによってオルガンとその音楽も復活した。当初はオルガン建造の動きは保守的で、ほとんどが共和制以前の様式のままに再建された。ウースター大聖堂がよい例といえる。ダラムの女婿トーマス・ハリスが1663年に建造した新しいオルガンのストップ・リストは、1613年のダラム・オルガンとほぼ同様だった。しかし、18世紀初頭には、こうした古いタイプの楽器に代わって、新しい独自の様式を持つイギリス・オルガンが建造されるようになった。トーマス・ハリスの息子レナトウスが1722-4年にロンドンの聖ダイオニス教会に建造した楽器が、この時代の典型的なものだ。<sup>5</sup>

<u>Great</u> (第2鍵盤:GG-d3, 51鍵?)	<u>Choir</u> (第1鍵盤:GG-d3, 51鍵?)	<u>Ecchoes and Swellings</u> (第3鍵盤:g-d3, 32鍵)
Open Diapason	Open Diapason	Open Diapason
Stoped Diapason	Stoped Diapason	Stop Diapason
Prinsipal	Prinsipal	Prinsipal Full Bodied
Great Twelfth	Flute	Cornet III
Fifteenth	Fifteenth	Trumpett
Tierce	Bassoon	Cremona
Larigo	French Horne (from c1)	Vox Humana
Sesquialtera IV	Cremona (from Great)	
Trumpet	Clarion (from Great)	
Cremona		
Clarion		
Cornet V (from c1)		

それ以前のイギリス・オルガンには見られなかった要素としては、リード・ストップ（手鍵盤それぞれに）、グレート・ディヴィジョンのミクスチュア、そして多数のミュートーション・ストップが挙げられる。3段手鍵盤をもつオルガンではあるが、同時期（バロック）のドイツに見られる、より大型のオルガンと混同しないよう留意しなければならない。独立したペダル・ディヴィジョンがないのである。イギリス・オルガンに独立したペダル・パイプ群が現れるのは1790年代以降、それが一般的になるのは19世紀中期以降のことだ。足鍵盤がある場合も、グレート・ディヴィジョンの低音部からプル・ダウンして、左手が届かない最低音部を足で演奏できるようにしたもの過ぎない。グレート・最低音は現代の楽器（あるいは同時代のドイツの楽器）の最低音のCより4音ほど低かったから、ペダ

ルで補助することは重要だったと思われる。もう一つこの時代のイギリス・オルガンに特有なのは、音域の狭い第3手鍵盤だ。この手鍵盤は左手で演奏する音域をもたず、右手でソロのパッセージを弾くためだけに使用される。このようなオルガンについては、図版1および2を参照されたい。

1730年代まで時代をくざると、イギリス・オルガンにはもう一つの革新があった。スウェルである。いわゆるスウェル・オルガンは1712年に発明され、1730年には平均的な大きさのイギリスのオルガンはすべてスウェル付きとなった。その名のとおり、スウェル・ディヴィジョンがあれば、オルガニストはこのディヴィジョンの音量を制御することができる。現代では当たり前のように、スウェル・ディヴィジョンが組み込まれたことによってオルガンの表現力は飛躍的に広がったのである。このような、2段鍵盤または特有の音域をもつ3段手鍵盤があり、スウェル・ディヴィジョンがあり、ペダルはないというオルガンが、1830年代までのイギリスの主流となった。21世紀の私たちから見れば、このような楽器には大きな限界がある——そもそもペダルなしのオルガンでどうやってバッハを弾くというのか？ しかし初期イギリス・オルガンの立場から見れば、同時代の、たとえばドイツとは、そもそも求められるものが違うのである。

ほぼ19世紀中期に至るまで、イギリスの教会オルガンの目的は2つしかなかった。地方の教会においては、会衆が歌う詩篇歌に伴奏をつけ、礼拝の前後にヴォランタリーを演奏する。J.S.バッハその他のドイツ様式のオルガン向けに書かれた作品は知られておらず、もてはやされてもいなかったから、当時のイギリス・オルガンは十分目的に叶っていた。大聖堂においては、唱詠礼拝を歌う聖歌隊の伴奏をすることがオルガンの目的だった。教会をオルガンの響きで満たす必要はなかった。そのため、大陸の大聖堂では巨大な空間いっぱい響かせるに足る非常に大型のオルガンが多かったのに対して、イギリスの大聖堂のオルガンはふつうの教区教会のオルガンとほとんど変わらなかったのである。実際、ビクネルはこの時代のイギリス・オルガンを「世界でもっとも静かなオルガン」と評している。<sup>6</sup>これが、1600年代後期から1800年代初期にかけての150年間にわたって、標準的なイギリス・オルガンとなった楽器である。それがなぜ19世紀中葉にことごとく消滅したのか、どんな楽器に取って代わったかについては、次回に論ずることとしたい。

---

1 Stephen Bicknell, *The History of the English Organ* (Cambridge: Cambridge University Press, 1996).

2 Ibid, p. 23.

3 James Boeringer, *Organa Britannica* (Lewisburg: Bucknell University, 1989), vol. 3, p. 313.

4 House of Lords Journal Volume 6. (Published 1802). "Ordinance for the further demolishing of Monuments of Idolatry and Superstition." (May 9, 1644). <<http://www.british-history.ac.uk/report.asp?compid=37515>>

5 Bicknell, p. 158.

6 Ibid, p. 213.

---